

ビーチバレーボールNTCサポート報告

吉田 清司 (法学部教授)、齋藤 実 (文学部ジャーナリズム学科教授)

1) マネジメントサポート

「ビーチバレーボール川崎マリエンを中核とした情報戦略機能の構築」について、下記の内容でミーティングを実施した。

- 日時：2021年11月17日(水) 10時～11時
- 場所：オンラインZoomミーティング
- 出席者：吉田清司(専修大学)、齋藤実(専修大学)、酒匂宙夢(日本バレーボール協会：JVA)、牛尾正和(JVA)、山室宏徳(JVA)、高橋波奈子(JVA)
- 議題①：JVAビーチ強化としての情報戦略の活用構築
- 議題②：体制構築に際しての現状と課題
- 議題③：スポーツ庁事業を活用した情報戦略機能の整備・構築
- 議題④：①～③を進行する上での課題や留意点

2024パリ大会以降の強化計画の一つとして挙げられている情報戦略機能の拡充について、議論を交わした。

① JVAからの状況報告：

専修大学スポーツ研究所と川崎マリエンは、2019年の連携協定以降、新型コロナウイルス

の影響で強化事業も制限され、思うように連携が図れずにいた。JVAからも、東京大会を終え、パリ2024大会に向けて強化体制も変更された。競技別NTCを中心に活動をしている牛尾氏がビーチ強化委員長となり、新たに強化計画を策定している。その中で、これまで以上に他国(特にアジア諸国)の映像データのアーカイブ・分析情報を蓄積し活用していくことが課題として挙がっている。そこで、川崎マリエンを中核として各チームに情報戦略データを発信していくことを、初動のテーマとした。

これまで構想としては挙がっていたのだが、2021～2022年の優先課題として、競技別NTC事業、もしくは次のスポーツ庁の事業を活用して推進していく案が出ている。これは、拠点に不足している機能を、外部専門家を招聘して機能強化を図るといった事業である。現在川崎マリエンには情報戦略を専門とするスタッフがいないことから、スポーツ情報戦略の専門家を招聘し、映像データのアーカイブを中心に体系を構築することを想定している。これらについて、次の2点に関して専修大学スポーツ研究所へ相談、助言をいただきたい。

1) 情報戦略の中核拠点構築を推進していく上での留意点や想定される課題について

2) 専修大学×JVA(競技別NTC)の協定としての連携可能性について

現状では、強化拠点としてのハード面は整理されてきているが、課題は強化組織内に情報戦略を専門とするスタッフの配置がなく、物・経費はあるものの中核となるヒトがないことと考える。

② 専修大学からの回答：

東京都北区のハイパフォーマンスセンターでは、インドアバレーボールについてはJISSnx(旧SMARTシステム)を利用してはいる。しかし、近年では、男女チーム共にVolleymetrics(hudl社製)を導入していることもあり、JISSnxのニーズや利用頻度は、かなり落ち込んでいる。Volleymetricsをビーチで運用する場合は、下記の点に注意が必要である。

1) JISSnxの公開範囲について：誰のための・何を目的としたサービスなのかを予め定義した上で、利用対象者を明確にしておく必要がある。ビーチ選手は、国内でもお互いに敵同士という状況になるかと思うので、曖昧な線引きをしてしまうと、利用できない選手から反発の声が上がってくるのが予想される。システムを運用するJISSは、利用対象の制約を設けていないので、NFの裁量で決めることができる。

2) JISSnxコンテンツの収録について：ビーチはインドアと比較して相当な試合数があり、それらの映像を収集するのも、集めた映像をJISSnxに登録するのも、かなりの手間になるのではないかと想定する。運用ルールの一案として、「サービス利用者は、自チームの試合は必ず撮影(自チーム以外の試合もできるだけ撮影)し、JVAに提供すること」とすれば、映像を集められるのではないかと思う。その点では、映像の受け渡しの方法は検討が必要ではあるが、利用対象者は広い方が良いでしょう。加えて、利用者にはJISSnxへのアップロード権限までを与えて、JISSnxへのアップロードまでを義務付けられれば、登録作業コストも分散できるかもしれないが、少々ハードルが高そうである。

3) Volleymetricsについて：以前にビーチバレーメンバーに紹介したが、基本的には1チーム

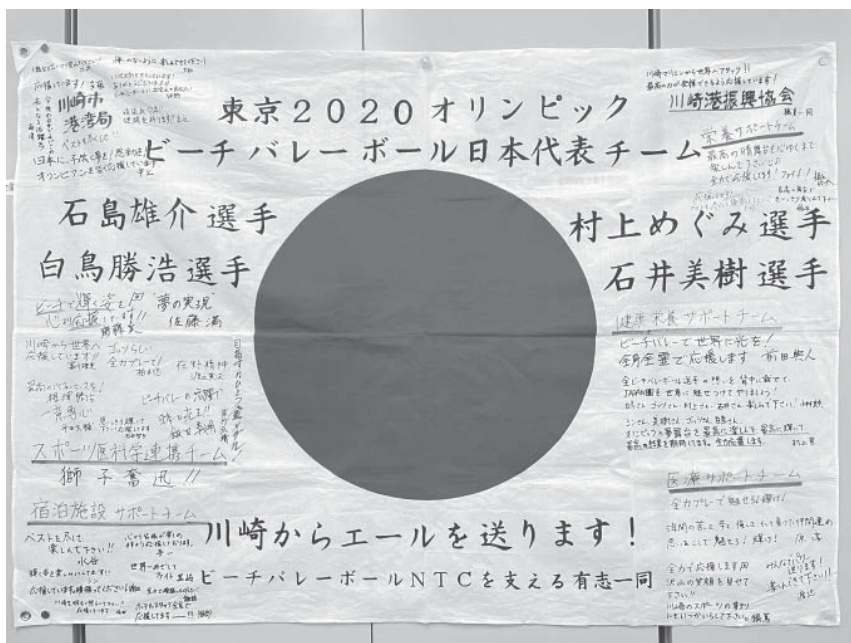


写真1) 東京2020ビーチバレーボール日本代表選手へ寄せ書き



写真2) ビーチバレーボール東京2020日本代表チーム 白鳥勝浩・石島雄介ペア

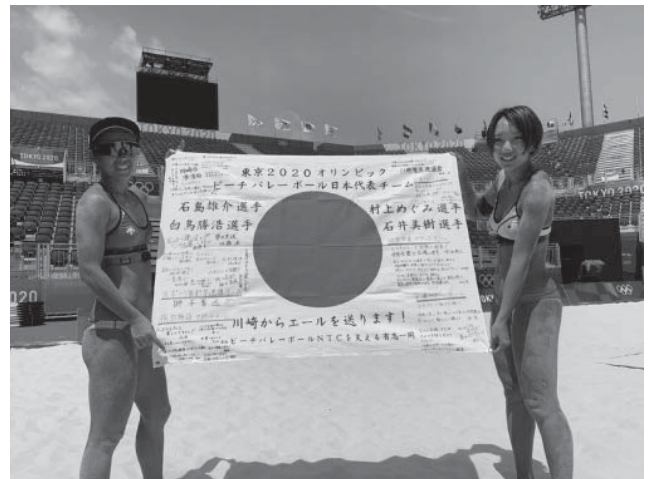


写真3) ビーチバレーボール東京2020日本代表チーム 石井美樹・村上めぐみペア

に2名の選手を固定登録する必要があることや、確実に試合が入手できるわけでない(他の参加ユーザーによって視聴可能な試合数が増減する)という点がネックで導入を見送って経緯があった。諸外国のビーチの情報戦略活動の調査・研究を行うとともに、五輪出場権獲得条件を踏まえて、アジアにフォーカスして情報戦略活動を行い、そこで映像収集・分析・インテリジェンス活動を展開するのが肝要と思う。(写真: 吉田清司)

2) 広報活動サポート

(1) 東京2020ビーチバレーボール日本代表選手へ寄せ書きへの協力

川崎市と川崎マリエンの指定管理である公益社団法人川崎港振協会は、東京2020オリンピック競技大会のビーチバレーボール日本代表チーム白鳥勝浩・石島雄介ペア、石井美樹・村上めぐみペアの活躍を願い、健康・栄養・医療・スポーツ医学・宿泊施設等の面でNTC競技別強化拠点施設の活動を日頃からサポートを行う地域の企業等と協力して寄せ書きを作成することとなり、スポーツ研究所も寄せ書きに協力を行った(写真1)。寄せ書きは2021年7月19日(月)の選手村への入村時に、日本バレーボール協会のスタッフから選手へ手渡され(写真2、3)、大会当日にはビーチバレーボール大会会場(潮風公園: 東京都品川区)に掲げられた。

大会終了後には選手から寄せ書きを借用し、JR川崎駅のコンコースのショッピングセンター「アゼリア」の展示スペースに掲出され、東京2020大会の報告と、ビーチバレーボールNTC(ナショナルトレーニングセンター)、および川崎マリエンの広報に活用された(写真4)。

(2) インターンシップ学生の派遣

文学部ジャーナリズム学科の授業科目「インターンシップ」において、「ビーチバレーボールNTC、およびビーチバレーボール強化選手に関する広報活動や、トレーニングやコンディショニングに関するサポートを行う」という条件にて、2021年8月23日(月)から9月3日(金)の期間で1名の学生を派遣した。実習は、①ビーチバレーボールNTCの実務(暑熱対策、動画撮影、備品管理等)、②資料作成、リ

サーチ、③ビーチバレーボールNTCのステークホルダーと必要なスキルを学ぶ、④大会運営: 受付、表彰式アテンドなどの内容が行われた(写真5)。

2021年11月20日(土)にインターンシップの活動報告会が行われ、学生による活動報告がなされた。報告会にはビーチバレーボールNTCマネジメントスタッフの高橋波奈子氏、高野和弘ビーチバレーボール事業本部長(当時)が出席され、活動に関する講評を行った。



写真4) 寄せ書きは大会後に「アゼリア」の展示スペースに掲出された



写真5) インタンの実習風景